The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語条件文とバックシフト
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2016, 2015, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57355
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語条件文とバックシフト

井元秀剛

1. はじめに

英仏語の条件文において、if あるいは si で導かれる条件を表す前件の時称形が、現在の事実に反する仮定を述べる時は過去形、過去の事実に反する仮定を述べる時は過去完了(仏語では大過去)というように、過去方向に一つずつずれて表現される現象はバックシフトとして広く知られている。

(1) a. If it *was* fine (now), I would take a walk in the forest.

b. If it *had been* fine (yesterday), I would have taken a walk in the forest.

一方、対応する日本語を見る限りそのような現象は観察されない。

(2) a. 晴れて{いれば／いたら}、森に散歩に行くんだけれど。

b. 晴れて{いれば／いたら}、森に散歩に行ったんだけど。

後件の部分は純粋に過去か現在かで決まり、前件の部分は今のことであろうと、過去のことであろうと、「晴れていたら」も「晴れていれば」も同じように使用でき、どちらも反実の意味を表現できる。未来のことについても

(3) a. 明日晴れたら、森に散歩に行きます。

b. 明日晴れれば、森に散歩に行きます。

の両方が可能で、特に(3a)と(3b)で晴れることの蓋然性の高さに違いがあるわけではない。しかしながら日本語でも英仏語と同様に，ル形／タ形の対立，さらにル形／テイル形の対立が，テンスやアスペクトの対立ではなく，反実姓にまつわるモーダルな対立を表すために使われることもあるという指摘を工藤（1997)がしている。

(4) a. （３か月で死んだ）あの子が<u>生きていた</u>なら，今頃は大学生に<u>なっていた</u>だろう。

b. (行方不明の）あの子が<u>生きている</u>なら，今頃は大学生に<u>なっている</u>だろう。

（工藤 1997:51)

(5) a. すぐ病院に<u>運んでいた</u>なら，<u>助かっていた</u>だろう。

b. すぐ病院に<u>運んだ(の)</u>なら，<u>助かった</u>だろう。 （工藤 1997:52 ）

(4)のル形とタ形の対立は，タ形を用いた(4a)は反実，ル形を用いた(4b)は事実未定であり，(5)のテイタ形とタ形の対立はテイタ形を用いた(5a)は反実，タ形を用いた(5b)は事実未定で，そのような区別のために用いられているという。実際のところ日本語において，過去性や完了性と反実性はどのような関係にあるのだろうか。

2. バックシフトに用いられる過去形

メンタルスペース理論では BASE, V-POINT, FOCUS, EVENT という４つの基本スペ

ースの組み合わせで時称価値を記述する[1]。ここで PAST を

(6)　隣接した二つのスペースの一方が他方からみて過去の位置にあること

と定義すると、バックシフト現象は

(7)　PAST を表すための時称形が時間的な過去性ではなく、非現実の属性を表すために用いられる現象

と再定義することができる。(7)における「非現実」とは「話し手の現実」に登録されている事態と異なる事態のことを言う。if P　もしくは si P によって導入された P が非現実である場合、話し手の現実スペースの中に～P が登録されている。(1)は反実仮想文であり、「話し手の現実スペース」と「現実スペース」は重なり、そこでは「晴れていない」という事態が登録されている状況であえて条件スペースを構築し、その中で「晴れる」という事態を登録しているのである。(1a)では本来 PAST を表すために用いられる過去形 was が now と共起していることからわかるように、時間的な意味では用いられておらず、非現実であることを表すために用いられているから結果的にバックシフトになっている。(1b)も同様で、本来 PAST+PAST の意味を表す過去完了形であるが、2 つの PAST のうちの一つが過去を表すためではなく、非現実を表す働きをしているのでバックシフトになっている。このような観点から

(8)　If it *is* fine tomorrow, I will take a walk in the forest.

の現在形 is は未来の事態でありながら現在形で表現しているからといって(7)で規定するバックシフトにはあたらない。(8)はただ単に明日晴れることを仮定しているだけであって、「晴れない」という事態が「話し手の現実」の中に登録されているわけではないからである。これに対し

(9)　If it *was* fine tomorrow, I would take a walk in the forest.

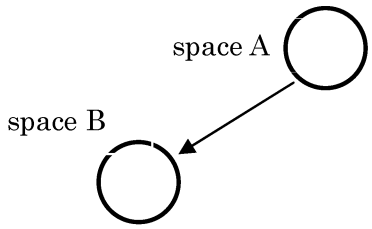
はバックシフトである。話し手は明日は晴れないと思っており、～P(晴れないこと)が「話し手の現実」スペースに登録されており、if 節で非現実の事態を導入しているからである。(9)は is で表現できる内容に対して非現実であること示すために was と表現したものでありバックシフトなのである。(9)は未来のことがらであるから、現実スペースにおいては～P そのものも未実現であり反実の事態を仮定しているわけではなく、なさそうな事態を仮定しているにすぎない。曽我 (2013)は条件文の意味において、(1)のような「反実」の意味と(9)のような「なそさう」の意味を区別するが、どちらも「話し手の現実」スペースで～P が登録されているということに違いはなく、本稿では「非現実」として「反実」と「なさそう」の意味を区別せず、その両方を表す名称として用いる。バックシフトの現象の確認のためには、そこで用いられている時称形式が PAST を表すために用いられる形式であることと、その形式が過去の意味ではなく、非現実の意味で用いられていることの 2 つが必要である。

PAST は英仏語の場合、図示すると以下のようになる。

---

[1] スペース概念および、各基本スペースの定義については井元 (2010)参照。

(10)

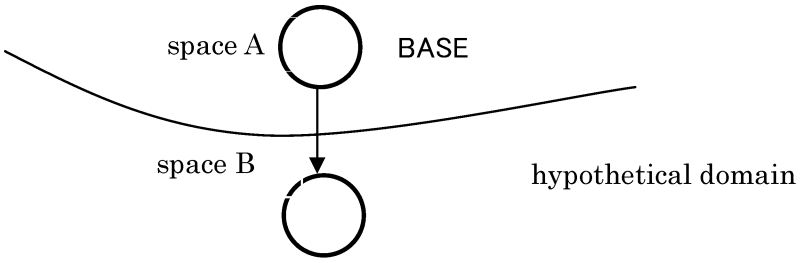


この図では左側が過去方向を示し、(10)は B スペースが A からみて過去の方向に作られたことを示している。

(11)　It *was* fine yesterday.

という通常の過去形はまさにこの構造をしており、BASE と V-POINT がおかれる話し手のいる位置である A からみて、過去方向(yesterday)にある B のスペース内において be fine というイベントが成立したことを述べているのであり、B に EVENT と FOCUS がおかれる。was という過去形はまさに B が過去であることを示すために用いられているのである。これに対し同じ it was fine であっても(1a)の中にあるものは図示すると次のようになる。

(12)



B が A の真下でありながら仮定領域(話し手の現実と異なった属性を持つ領域)の中に設定されていることに注目してほしい。このとき、PAST の定義的属性である過去性は失われ、仮定領域に位置づけるために was が使われているのである。このような PAST を表す時称の表す価値の変質は言語の枠を超えて広く観察される事柄であるから、英語の過去形、フランス語の半過去形という時制に特有の性質なのではなく、PAST のスペース構成が持つ特質であると考え、井元 (2010)以降、筆者は PAST の定義を拡張し、 (12)の価値を併せ持つことのできる(10)の形を本質的に表すものとして PAST を再定義している。PAST は英語では過去形の他に現在完了や未来完了を含むあらゆる完了形(have+過去分詞)形がこの素性をもつが、(12)の構成を指定し、バックシフトを起こし得るのは過去形と過去完了形の一部にすぎない。またフランス語でも複合時制はすべて PAST を指定しうるが、(12)の構成になりうるのはやはり半過去と大過去だけである。その働きを主として担うのは英語では過去形、フランス語では半過去形で、どちらも BASE からみて過去の位置に EVENT がある。英語の過去完了やフランス語の大過去は PAST+PAST の意味を表しており、2 番目の PAST の意味は「助動詞+過去分詞」の複合からきている。だが、通常はこの 2 番目の PAST が表しているのは時間的な先行性である。(1b)の過去完了も(12)の部分を担って

いるのは助動詞 had の過去形による PAST であって、have+pp という構成による PAST は仮定世界におかれた後で、その世界の中における先行という(10)の部分の意味を担当しているのである。複合形の PAST が(12)のようになって純粋に非現実の事態をあらわすのは

(13)　If Boris *had come* tomorrow, Olga would have been happy.

(Fauconnier 1985:111)

のように未来のことがらでありながら、例えば Boris が故人で、来ることが絶対にありえないとわかっているような場合、過去形を用いると「なさそう」という可能性を残すので、あえて「反実」の意味をだすために、「非現実」の解釈を二重に適応しようとする場合に限られる[2]。それ以外は英語における現在完了形や未来完了形など、フランス語の大過去以外の複合時制は「非現実」の意味を表さないのだから、BASE からみた過去であるという素性はバックシフトをおこすための重要な素性と考えて良いと思われる。

また非現実解釈で用いられる過去形はしばしば現実解釈の形式と同一環境において対立する範列を構成している場合が多い。例えば(8)と(9)は現実解釈なら is、非現実解釈なら was というように現在形と過去形が現実性に関して対立し、選択できる関係にある。過去の想定にかかわる条件文は反実仮想文となるのが自然で、その解釈のもとでは過去完了形しか選択できない。

(14) a.　If Boris *had come* yesterday, Olga would have been happy.

b. *If Boris *came* yesterday, Olga would have been happy.

しかしこれは反実仮想を前提とするからであって、if 節の中で事実かどうかを話し手が知らないという認識論的条件文ではバックシフトは起こらず、

(15)　If Boris *came* yesterday, He loves Olga.

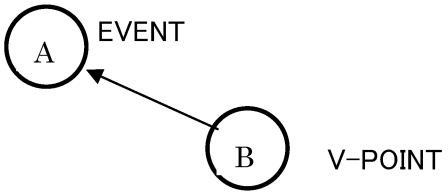
のような文は考えられる。「ポリスが昨日来た」というのは他人から聞いた情報で、話し手のメンタルスペースの中で完全な事実として登録されているわけではない。しかしながら「ポリスは来ていない」とも思っていないわけだから、～P が登録されているわけでもないのである。従って P を非現時として描く意図はないので、バックシフトは起こさないのである。このような可能性も考慮にいれるななら、if 節に関する限り、過去のことがらに対しても現実解釈か非現実解釈かによって If Boris{ *came* / *had come* } yesterday の対立は存在していると言えるのである。

3.　日本語の過去形

日本語において PAST の素性を表し得るのはタ形であり、井元 (2012)で以下のように規定した。

[2] 詳しくは井元 (2016)参照。

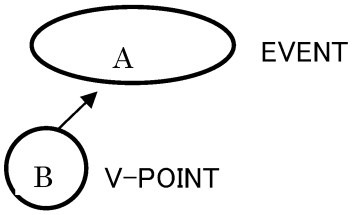
(16)　タ形



(EVENT を時間的に前とするような位置に V-POINT が設定される)

これは次のように表記されるル形と対立している。

(17)　ル形



(EVENT を時間的に同じか後とするような位置に V-POINT が設定される)

このように日本語ではスペースは EVENT が先に設定され、V-POINT がそこから遊離する形になり矢印であらわされる視点の向きも英仏語とは逆になる。さらに英語の過去形やフランス語の半過去形と異なり、あくまでも V-POINT と EVENT 間にのみ設定される関係であって、BASE の位置とは無関係である。実際タ形を内部に含むタラ条件文において

(18) a.　駅に着いたら電話します。

b.　駅に着いたら花子が待っていた。

のどちらの前件も「着いた」というタ形だが、(18a)では未来の、(18b)では過去のイベントを表しており、発話時点からの位置関係は全く示されていない。タ形が示すのは、あくまでも後件の出来事よりも前件が先行するということだけなのである。ここに英仏語との本質的な違いがある。日本語の場合絶対テンスの基準となる BASE の位置を決めるのは主節の時制であって、従属節の前件にあらわれる条件文内の時制は BASE とは無関係である。これに対し前節で述べたように、英語の if 節やフランス語の si 節は絶対テンスの時制を要求し、英語の過去形もフランス語の半過去形も BASE からみた PAST の位置関係にあるイベントを描くために用いられるものであるので、この点が日本語と本質的に異なっている。

また、日本語のテイタ形は

(19) a.　When I got to the station, the train *had already left*.

b.　Quand je sui s arrivé à la gare, le train *était déjà parti*.

c.　駅に着いたとき、列車はすでに出発<u>していた</u>。

のように並べてみると、英語の過去完了やフランス語の大過去に相当する意味を担いうることがわかる。しかしながらテイタ形はあくまでもテイル形にタ形が下接したものである。井元 (2012)で述べたように、テイル形は PAST を表すための形式ではなく、イベントの中

身を結果状態に変質するための語彙要素であり、その一部が完了の意味と重なるにすぎないと思われる。仮にテイタ形に PAST 相当の意味内容を認める場合でも、バックシフトを認定するためには、テイタ形が本来もっていた「結果状態の存続」の意味が残っていないかどうか確かめる必要がある。

また英仏語に見られるような明確な「現実／非現実」の範列を日本語の過去形と非過去形の間に見いだすのはむずかしい。(8)(9)に対応するものとして本稿では(3)をあげたが、「晴れれば／晴れたら」の対立は同一の環境下におけるル形とタ形の対立ではなく、レバ条件文とタラ条件文の対立であって、条件文としての意味内容そのものも異なる。タラ条件文はタ形、ト条件文はル形しか許容しないのであるから、英仏語にみられるような同一環境下における「現在形／過去形」の対立はト、タラ、レバ条件文の内部の間では生じない。「ル形／タ形」が同一の範列内にあるのは工藤があげたナラ条件文の場合だけなのである。

4. ナラ条件文における「現在形／過去形」の対立

4.1. 「ル形／タ形」

日本語の「P なら Q」という条件文は、条件節 P の述定部分に「ル形／タ形」の選択を許す構造になっている。そして確かに (4)のように並べると、「生きていたなら」は反実仮想、「生きているなら」は事実未定の解釈に傾く。しかしながら井元 (2016)で述べたようにナラ条件文は断定の助動詞ナリから来ていて、P という命題内容そのものを仮定するのではなく、P と断定することを仮定しているのである。例えば

(20) a. 明日晴れるなら、森に行きます。
b. 明日晴れれば森に行きます。
c. 明日晴れたら森に行きます。

(20bc)のようなレバ条件文やタラ条件文では「明日晴れること」そのものを仮定の対象としているので、実際に明日にならなければ後件が発動するか否かは定まらない。これに対し(20a)のナラ条件文の場合、仮定しているのは「明日晴れると断定すること」だから、天気予報などで明日晴れることが予期されていて、そう断定できるのなら今日のうちから森に行ってもよいのである。このような観点から(4a)の「生きていたなら」は「生きていた」と断定できることの仮定だから、自分は確認していないが、行方不明になっていた自分の子供が生きていたと伝えられた後の発言という文脈で

(21) あの子が生きていたなら、今頃は大学生になっているだろう。

を解釈するなら(4b)と同じ内容であくまでも事実未定である。そもそも(4a)の場合も、(21)の場合も仮定している内容は「あの子が生きていた」と断定することであり、断定の対象となる「生きていた」によって表されるイベントは過去の結果状態であることに変わりはなく、元の時間的意味を保持しているためバックシフトと認めることはできない。(4a)の反実解釈は「大学生になっていただろう」という後件の述定にも関係していると思われるが、「～していたなら、～していただろう」も反実に限られるわけではなく、知り合いの家

に行ったらちょうどその家の息子が帰省中であったことを報告したあと、その相手から

(22)　息子さんが帰省していたなら、両親も喜んでいただろう。

と言われた場合など、この仮定は事実未定であって反実ではない。また「息子さんが帰省していた」のタ形も過去の意味を保持している。(22)は認識論的条件文であって、(15)のようにそもそもバックシフトの対象にならないと反論されそうだが、P と断定することを仮定するというナラ条件文は、そもそもそのような認識論的条件文に最も適応する構造になっているのである。(4b)(5b)の事実未定というのも伝聞による事実未定であり、認識論的条件文の解釈が最も自然な解釈だろう。P を仮定することは、P と断定することを仮定することに通じるから P を仮定するという意味でこの構文を用いることは可能である。しかしその場合、ル形とタ形の間で現実性に関する意味の違いは生じない。

(23)　液体にリトマス試験紙を浸して、赤が青に{変わるなら／変わったなら}、その液体はアルカリ性です。

またル形を用いても非現実の意味を表現できる。

(24)　この人形が生きているなら、一緒にスキーを滑るのだが、、。

このようにナラ条件文の内部で「ル形／タ形」の対立が「現実／非現実」の対立に対応していると言う事実はなく、タ形はあくまで(16)を表すために用いられているのであって、(12)のような同一時間における非現実の事態を表しているとは認められない。

4.2.　タ形／テイタ形

テイタ形は本来の形が PAST+PAST を表すためのものとは認められないので、バックシフトを認定することは難しい。しかしながら工藤があげる (5)は現実性に関して明らかな違いが認められる。仮にその現象がバックシフトとは無関係であるとしても、なぜそのような明らかな解釈の違いを生むのか、ということは説明されなくてはならない。

「タ形／テイタ形」はタラ条件文の場合でも範列を構成するので、(5)と同じような組み合わせを作ってみると、

(25) a.　すぐ病院に<u>運んでいたら</u>，<u>助かっていた</u>だろう。

b.　すぐ病院に<u>運んだら</u>，<u>助かった</u>だろう。

となり、反実仮想文としては(25a)の方が自然であるものの、(5)のようなはっきりした違いは見いだせない。少なくとも(25b)も反実で、事実未定ではあるまい。こうしてみてくると(5)に見られる明らかな差異は、「p した(の)なら q だっただろう」というタ形を用いたナラ条件文が、伝聞情報を確認する認識論的条件文の解釈を優先的に受けるという性質によるところが大きいことがわかる。実際、テイタ形を使った場合でも、認識論的解釈ができないわけではない。

(26)　「君、事故の時いたんだよね。太郎がどうなったか知らないか。」

「いましたよ。太郎ならあのとき、周りの仲間がすぐに病院に運んでいました。」

「そうか、すぐ運んでいた(の)なら、助かっているだろう」

のような文脈を想定すると、事実未定の解釈も可能だろう。問題はなぜ、タ形だと事実未

定の解釈が前面にでてくるのに、テイタ形だと反実の解釈が優勢になるのか、ということである。

まず、ナラ条件文が認識論的解釈を受けやすいというメカニズムについて確認しておく。「P なら Q」というナラ条件文の仮定が、P という命題そのものではなく、P と断定することである、ということは既に述べた。この P の情報が他人からの伝聞情報でまだ自分のなわばりにないと判断している話し手が、その P という情報を正しいと仮定するなら、という前置きを Q の主張の前に置いたのが認識論的条件文である。この前置きは P の断定を仮定することに他ならないから、ナラ条件文の構造に本質的に合致していることは明らかだろう。今、(5)で仮定された断定の対象となる P の部分だけをとりあげてみると

(27) a. すぐ病院に運んでいた。

b. すぐ病院に運んだ。

である。過去に起きた 1 回限りの出来事を最も自然に伝えるのは(27b)の方であり、(27a)はテイル形を用いる積極的な理由が存在しなければやや不自然である。テイル形は結果存続もしくは状態継続の意味を表すが、(27)では「すぐ」という副詞があることから状態継続の解釈はうまれにくく、「もうそのときには既に運び終わっていた(だから何の問題もなかった)」のようなニュアンスを込めた解釈ならあり得るという程度であろう。実際(26)はそのような形で解釈された認識論的条件文である。状態継続の解釈が生まれやすい環境では、認識論的解釈も自然である。

(28) テレビを見ていたなら、あのニュースはご存じですね。

結局(5a)が反実解釈に傾くのは(27a)がテイル形の自然な解釈を想定しにくいことから来ているように思われる。

では、そのような場合、なぜ反実の解釈が自然になるのだろうか。テイタ形が反実仮想と親和性が高いことはタラ条件文でも確認できる。

(29) a. そこに行ったら太郎に会えた。

b. そこに行っていたら太郎に会えた。

(29a)は実際にそこに行ったら太郎に会えた、という事実解釈と、仮にそこに行っていたら会えただろうという反実仮想の解釈の両方が可能だが、(29b)は反実仮想の解釈しかない。状態性の述語が仮定と結びつきやすいことは田窪 (1993)などによって指摘されている。

(30) 時間があったら、映画を見に行った。 (田窪 1993:171)

(30)は過去の一回的事態に関する事実解釈としては非文で、仮定解釈でなくてはならない。テイル形の本質的な意味の働きは井元 (2012)で主張したように、開始点もしくは終了点以降の結果状態の存続であり、動作動詞を状態動詞に変化させる。それによって仮定解釈、過去の場合は反実仮定解釈に有利な状況を作り出していると言える。さらにその場合、「p していたら」の解釈は、p という行為の結果状態(「p している」)を認知的に設定し終えた(「た」)らと分析することが可能である。ナラ条件文の場合は、そのような認知操作を設定したことを認めるなら、という条件として読める。つまりこの場合のテイタ形のテイル

部分は結果状態の存続、タの部分は後件の断定に対する認知操作の先行性という本来の機能を果たしているのである。従って本質的にバックシフトとは別の現象であり、日本語では「～していたら」あるいは「～していたなら」が仮定性と結びつきやすく、過去の出来事の場合、過去は既定事実であるという外的な要因と複合して反実性と親和性が高くなるという現象が観察されるということにすぎない。

5. 後件におけるタ形、テイタ形の働き

本稿ではバックシフトという観点から、主に前件における時称形についてみてきた。英仏語においてバックシフトの対象となるのは if 節、もしくは si 節に導かれた従属節の中の動詞に限られるからである。しかし工藤では後件に用いられたタ形の例も挙げられている。

(31) 戦争がなかったら、いまごろヨーロッパに留学して、各国の美術館や博物館を観て廻ってたでしょう。 (流転の海 in 工藤 1997:55)

工藤によれば、(31)に観られるようなタ形は、現在のことであるが、非現実性を明示するために用いられているという。確かに、(31)は現在のことを語っているので「廻ってた」のタ形が過去を表しているとは必ずしも言えない。となるとタ形が本来の過去の意味を変質させ反実の意味に変化しているというバックシフトの用件にあてはまるようにも見える。だが、工藤も文脈上反実が明らかであれば非過去形も用いられると指摘しているように「廻っている」と言い換えても全く問題はない。反実であることをはっきりと明示する働きをしているのはむしろ、「戦争がなかったら」という前件の方であり、「ル形／タ形」の対立が必ずしも「現実／非現実」の関係に対応しているとは言い難い。あえて違いがあるとすれば

(32) a. カミューが参加できたら、明日の「異邦人」のコロックはすばらしいものになったのだが、、。

b. カミューが参加できたら、明日の「異邦人」のコロックはすばらしいものになるのだが、、。

のような対立で、カミューがすでに故人であって、コロックの参加が絶対にあり得ない場合、(32)はどちらも可能だが、存命中で実際に参加も見込まれるという実現可能な仮定の場合は(32a)が使えないということぐらいだろう。この場合のタ形は反実というより過去に成立していた状態を表すタであり、

(33) 明日は 3 時からコンサートがあったのですが、急に出社を命じられたのでいけなくなりました。

のタと同様のものだと思われる。つまり存命中で可能であったときであれば、過去における未来の予定的状態を記述しているのである。実際純粋な現在の状態の反実仮定で、

(34) 僕が君なら、明日のコンサートには絶対に{行くんだけれど／行ったんだけれど、、。}

は「行くんだけど」の方が「行ったんだけれど」より自然だと思われる。「行ったんだけれ

ど」は可能だとしても、既にそのような決定を下していたという過去の意味を保持していると思われる。(31)も、「戦争がなかったら」という前件の内容が過去であるので、その仮定が成立した過去の時点で、現在「観て回ってた」という状態が成立していたという過去の状態を表していると考えられる。後件が過去や現在のことであっても、「～していた」は仮定の帰結として用いられるが、すわりがいいのは前件の仮定が過去の場合である。前件の仮定は発話レベルでは後件の結論を引き出す以前に行う過去の操作だから内容そのものが過去である必要は必ずしもなく、以下のような実例もある。

(35)　姉の思いやりがはっきりと感じられます。うかうかと、このまま何年も過ごしていたら、私という人間はどうなったでしょうか。

（女の情景　in 工藤 1997:54）

この場合も、筆者には「どうなる」もしくは「どうなっている」の方が自然であると感じられる。「どうなった」は過去におこなった仮定に対する結論がどうでていたといういささか特殊な解釈を要求しているのではないだろうか。

6. 結論

以上のような考察から　BASE からの位置を必ずしも示す必要のない日本語の時称構造ではバックシフトの現象は観察されず、単に仮定が状態性と親和性が高いためにテイタ形がしばしば仮定性の意味とともに用いられることが多いというにすぎない、と結論づけることができる。

参考文献

Cutrer, M. (1994), *Time and tense in narrative and in everyday language.* Ph.D.thesis, University of California San Diego.

Fauconnier, G. (1985), *Mental Spaces*, Cambridge University Press.

井元秀剛 (2010)『メンタルスペース理論による日仏英時制研究』ひつじ書房.

井元秀剛 (2012)「テイル形の意味構造」『言語文化共同研究プロジェクト 2011 時空と認知の言語学 I』, 1-10.

井元秀剛 (2016)「条件文におけるスペース構成」『言語文化研究』42.

工藤真由美 (1997)「半事実性の表現をめぐって」『横浜国立大学人文紀要第 II 類（語学・文学)』44, 51-65.

曽我祐典 (2013)「仮定節<si P>における半過去の使用」『フランス語をとらえる－フランス語学の諸問題 IV』三修社, 17-31.

田窪行則 (1993)「談話管理理論から見た日本語の反事実条件文」『日本語の条件表現』, 169-183.

尚本研究は JSPS 科研費 26370448 の助成を受けて行われたものである。